平成17年度岩手県工業技術研究推進会議 議 事 録	(実施日) 平成17年10月20日(木)

(テーマ名)	高性能安全漆塗料の開発 (中間評価)

委員		質 問･意 見	回 答
E委員	①	この研究によって新しい市場を生むのではなく、既存の市場の生産者が利益を受けるという見方でよいか？	【発表者】 既存の漆産業の効率化に貢献できるが、漆固有の付加価値は新しい市場を生む可能性も大きい。伝統産業と新産業を両方見据えた形で進める。 【所長】 漆が良い材料なら工業製品の新市場に対応すべき。この研究の目的にも入っているので成功させたい。
	②	経済効果や雇用の予測をみると、新技術によって市場が増え、新しい売り上げと取れるがいかがか？	【発表者】 そうである。新しい市場に対応するため、伝統技法以外の塗装方法についても検討する。
	③	伝統工芸産業界では新規技術への抵抗が強いと感じるが、岩手の現状はどうか？	【発表者】 そのとおりである。そのために開発品の説明や試作品製作など目に見える形で振興を図るしかないと考える。 【所長】 業界の閉鎖感は感じている。UD鉄瓶の開発時も売れるのを見せて業界が動いた。市場側から刺激を与えるアプローチにも取り組みたい。
C委員	①	従来の漆塗り技術(硬化時間と雰囲気)が非常に難しい。硬化が早い漆が出来ればかなり楽になる。ﾒﾘｯﾄとしては、 A) 納期の短縮が見込める。 B) 漆の硬化雰囲気で木が狂うのを防げ、後調整の手間が省ける。	【事後補足】 期待に応えるよう頑張りたい。
	②	硬化が早く、紫外線に強く、かぶれず、吹付塗装も可能な漆塗料が出来れば相当普及する。	【事後補足】 理想形の塗料はすぐには実現困難だが、できるだけ近づけるよう問題点を一つずつ解決していきたい。
	③	漆は伝統工芸材料から大きく転換する時期に来ている。工業技術センターでも先端技術への応用に取り組んでほしい。	【事後補足】 期待に応えるよう頑張りたい。
H委員	①	漆、漆器は英語でなんと言うか？	【発表者】 辞書にはジャパンと訳されている。漆器はラッカーウェアである。 【事後補足】 漆はジャパニーズラッカー、漆器はジャパニーズラッカーウェアともいう。
	②	ラッカーというと外国人には安っぽく聞こえる。海外進出に向けてネーミングも考えると良い。	【事後補足】 今後検討したい。
	③	ひび割れはするのか？	【発表者】 ひび割れは木地の変形が大きい原因である。変形しなければひび割れしない。
	④	森林総研などから研究費を持ってくるのもよいのではないか？	【発表者】 情報収集したい。
A委員	①	このテーマの評価が一番低いが、あくまで実施が遅れたという理由か？	【所長】 そうである。予算取りなどで開始が遅れたためである。
F委員	①	産総研でも漆の研究を行なったときに、かぶれで非常勤が雇えなかった。独法化すると安全管理に非常にうるさいので注意して進めてほしい。	【発表者】 注意して進めたい。
D委員	①	非常に面白い研究だが、こういう研究こそ積極的に長期のパースペクティブを持って実施したほうが良い。研究期間が短いのでは？	【発表者】 今回のテーマは、漆分野で継続的に取り組んでいる研究の一部で12年度の開発技術の実用化を目指すものである。 【所長】 研究期間が短いのは私の方針である。基本的には2年で実施し、結果により次のステップに移るやり方である。
	②	長期計画があるならばそのことも調書に書いたほうがよい。	【発表者】 そのようにしたい。
	③	どのぐらいの漆の供給可能性があるのか？	【発表者】 浄法寺で現状0.6トンぐらい。それでも品質の悪いものは売れ残る。改質技術による商品価値向上が望まれている。